

【講演記録/愛知大学史シリーズ講演会】

愛大ささしま進出とその後の変化

愛知大学理事長・学長 川井 伸一
(2019年11月17日、愛知大学本館)

きょうは、講演の依頼を受けてからそれなりに準備をしたつもりですが、あまり時間がなく、限られた資料にもとづく範囲でのお話となることをお許しいただければと思います。

ささしまライブ全景



名古屋キャンパス完成図



まず、上の写真は本学キャンパスのあるささしまライブ地区を一望した写真です。この真ん中の高速道路と鉄道路線に囲まれた所が、名古屋市ささしまライブ24地区にあたり、その地区の東南の一角が愛知大学のキャンパスです。遠方の高層ビル群は



名古屋駅あたりです。下は愛大名古屋キャンパスの建物の完成予想図です。いろいろな段階で完成予想図が作成されていますが、これはおそらく2013年頃に作成された予想図ではないかと思います。この予想図が、だいたい現況のイメージとして理解してもよいかと思います。

きょうのお話は大きく分けると2つです。一つは、ささしまライブ24地区(以下、笹島)進出のプロセスの概況について取りまとめたものです。二つ目は、笹島進出後愛知大学はどうなったのか、どのような変化があったのかというものです。このテーマは重要なことだと思っていますが、ただ、それはいろいろ難しいところがありまして、本日は、私から見た変化のいくつかの事例をお示しして、それに基づいて笹島進出後をどう評価するかということになるかと思えます。

1 進出プロセス

1-1 名古屋市ささしまライブ 24 地区開発提案競技への応募競技

まずは、ささしまライブ 24 地区開発提案競技への応募ということです。その前提として確認しておくべきなのは名古屋市の笹島地区開発コンセプトです。これは 2007 年 7 月に出された名古屋市の募集要項の要点ですが、そこでの開発コンセプトは下表のとおりです。

名古屋市の開発コンセプト

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">1 国際歓迎・交流拠点の形成を目指した賑わいのある複合型まちづくり2 交流・環境・防災をキーワードとしたまちづくり3 名古屋駅地区のビジネス支援とポートメッセ支援の役割を担う4 施設機能 ①宿泊・会議場、②商業・業務・文化、③公園・親水空間、④住宅の導入 |
|--|

4 つのコンセプトが示されていますが、提案競技では、「特に①、②の機能をもつ」こと、そして「国際歓迎・交流の拠点形成を牽引していく当地区の中心的な施設の導入を図る」ことが強調されました。施設機能については、②のなかの文化に大学が入ると考えられます。

大学としては、募集要項が公表される以前の段階からいろいろな対応や準備をしています。詳しいことは十分知りませんが、ほぼ 2005 年の時点から、大学は名古屋市住宅都市局をはじめとして、随時、情報収集を図

っていたようです。2006 年 4 月には、当時の武田愛知大学理事長から名古屋市長に、協議の申し入れを提出しています。これはもちろん正式の契約ではなくて、これから協議をしたいという申し入れを行ったということだと思います。その後名古屋市と大学の事務当局間でいろいろ打ち合わせ、情報の交換があったと当時の事務担当者から聞いています。このように大学の執行部が関心を寄せた背景には、三好キャンパスの事情があったらろうと考えます。すなわち、三好キャンパスは名古屋市の中心から離れ、通学にも便利とはいえなかったうえに、入学志願者数の期待した効果も見られませんでした。後で見るように、本学の一般入試の志願者数は 1991 年をピークにしてその後、長期的には低下傾向がみられ、2005 年頃はピーク時の 6 割程度に落ち込みました。その状況の中で三好キャンパスの発展可能性について再検討を求められていたと推測します。

さて、その後、2007 年 6 月に、当時の大学の執行部が教職員に対して笹島進出計画の説明会を開きました。これは私も記憶しています。そのときに説明された内容は以下のようなものでした。投資規模は 250 億円程度、うち借入れは 90 億円と予定していたということです。そのための増収計画も予定していました。具体的には、まず 2009 年度に社会学部(仮称)ですが、それを設置して学費増を図る。2 番目は、2011 年度に豊橋と笹島のキャンパスに各 1 学部を新設する。これも学生の増員ということになります。その結果、2011 年度に収容定員増で 7,600 から 9,560 人を目指す、教員数は現行の学部卒教員数を上限として設置基

準プラス3名とし、2011年度に学費改定を行うというものでした。もちろんこれ以外の説明もありましたが、キャンパス別に説明会がそれぞれありました。それを踏まえて、翌7月に教職員の意向投票を実施しました。結果は、投票総数340名のうち賛成214名、反対111名であったことが記録に残っています。賛成投票は総数の約63%でした。

2007年7月に、名古屋市から先ほど見た募集要項が公表されました。そして大学としても検討を重ね、同年11月、大学の法人理事会において応募計画案を承認、そして提案競技への開発提案を行いました。

次に、当時2007年12月に実施された愛知大学の提案競技における提案についてみてみます。いろいろありますが、第一に、基本的には導入機能として大学側が提案したのは、①国際化、②情報発信・相互交流、③にぎわいの創出、この3点を柱にしています。これは、先ほど見た名古屋市のコンセプトへの対応として設定されたものです。

国際化に関しては、当然、国際系領域の2学部、すなわち現代中国語学部および国際コミュニケーション学部、それから2つのセンター、1つは国際ビジネスセンター、もう1つは国際研究センターというのが想定されていました。それと孔子学院です。情報発信・相互交流の面では法経3学部の移転配置、それから新領域新学部を1学部つくる、こういうことで位置付けていました。にぎわいの創出では9,000名余りの学生が笹島に移転をするということです。

第二に、施設構成に関しては4つのポイントを指摘しています。1つはキャンパスモールを中心とした建物、2番目は新しい

シンボルとしての本館、これは後でいろいろ出てきますが、現在の高層棟、100メートル級の高層ビルがそれに当たります。3番目は交流拠点の要となる講義棟、4番目は広く市民を受け入れる厚生棟といった内容で施設構成を説明しています。

第三に、具体的に建物建築の計画についてですが、応募予定の敷地はB敷地で、そこはB1とB2に分かれています。B1敷地はB敷地の西側部分で、講義棟と厚生棟がある場所です。B2敷地は本館高層棟があるところですが、B1敷地では地上11階、地下1階、高さ57メートルレベル、建築面積7,800平米、延べ床面積6万4,000平米という規模の建物を建てる。B2敷地のほうは、地上23階、地下1階、高さ100メートル、建築面積3,000平米、延べ床面積3万1,000平米、こういう規模の建物です。同時に地下駐車場をB1敷地とB2敷地に合計200台分用意する。さらには、B1敷地のみですが、自転車の駐輪場460台設置する。こういう内容です。

ささしまライブ24地区開発提案競技への応募状況はご覧のとおりです。2007年8月に名古屋市から公表された公募要項によると、A敷地は、ささしまライブ24地区の一番メインの敷地ですが、トヨタ通商、大和ハウス工業等を含む15法人が応募しました。A敷地のほうは愛知大学とは直接関係ありません。B敷地には、愛大をはじめとして7法人が応募し、この中には三井不動産、三菱地所、住友信託銀行などの大手の不動産や金融企業が含まれていました。

先ほど指摘した開発提案競技のプレゼンテーションが12月にあって、翌年1月15日に名古屋市の審査委員会を経て、名古屋

市長名の決定が通知、公表されました。

決定の内容は、A 敷地では、トヨタ通商を代表とする4社(大和ハウス工業、日本土地建物、名鉄不動産)の企業連合が最優秀提案者として決定されました。他方で、B 敷地は、愛知大学が最優秀提案者として決定され、次点はなしでした。愛知大学の提案が群を抜いて評価されたといえるでしょう。ただ、愛知大学の場合は土地の借地契約という選択肢を選びました。こういう形で決まっていたということです。

1-2 計画変更と第1期工事

これからがいよいよ名古屋市との契約を具体的に進めていく作業が予定されていたわけです。契約は2008年4月に締結されました。設計・監理業者として日建設計の協力を得ることになりました。しかし、その後大学はいろいろ深刻な課題に直面することになります。ご存じのことと思いますが、2008年秋に発生したリーマンショックの影響です。大学は当時デリバティブ商品をいろいろ取引していて、このショックの影響でデリバティブ商品の担保金の大幅な積み増しが求められました。大学の経営判断として一部の商品を解約することとし、多額の解約清算金を払うことになりました。このために2008年秋から2009年前半にかけて、大学は非常に厳しい状況に直面しました。当然、この事態は大学の笹島キャンパス計画に大きな影響を及ぼすことになりました。大学評議会や法人理事会ではこの対応をめぐって厳しい議論が展開されました。結論から言いますと、2009年3月28日の法人理事会におきまして計画変更が承認されました。3月30日、当時の理事長が記者

会見で変更内容を公表しています。その主な点は以下のとおりです。第一に、建設工事を1期でまとめてやるのではなくて2期に分けて行う、第1期は2012年4月まで、第2期は2015年4月開校というスケジュールに変更したということです。第二に、建設規模の縮小変更です。具体的には、B1敷地の講義棟の床面積を2,400平米縮小する、それからB2敷地の高層棟を23階建てから20階建てに変更し、それから床面積も4,700平米縮小する。どれぐらいのサイズなのか想像しにくいですが、B1敷地の2,400平米というのは当初計画の床面積の4%に相当します。4%減ということです。他方で、B2敷地の4,700平米は当初の床面積の約15%に相当する面積です。それによって建築コストを切り詰めました。第三に地下駐車場を全面的に取りやめること、第四に新領域新学部の設置を2015年以降に延期することです。したがって当面、第1期においては5学部、7,000人規模の学生をもって開校することにしました。

以上の計画変更は事業費用の縮小と支払いの分散を意図したものです。そのうえで建設費用総額を1期195億円、2期75億円、総計270億円と設定しました。資金源泉の構成は、自己資金の比率を当然にも大幅に引き下げて、他方で借り入れの依存度を高めて二期併せて計145億円の借り入れという計画です。

もう1つ、念頭に置いておきたいのは、第2期の費用に関しては、三好キャンパスの売却、主に土地ですが、土地の売却資金を充てることを組み込んでいました。資料によると、当時、三好キャンパスの土地資産の評価額についていろいろ検証した結果とし

て、40億円という試算が出ていました。それを資金に充てるという内容でした。以上の計画変更は大きな変更になりますので、計画変更を名古屋市に提出し、同4月初旬に名古屋市から承認をえました。

こういう計画変更の決定を踏まえて、工事を迎えることになりました。建設業者は竹中工務店です。この第1期工事の施設・設備の内容を具体的にどうするかについて、学内の新校舎建設委員会等を中心として頻繁に検討を行いました。私も、当時はまだ副学長にはなっていませんでしたが、経営学部の学部長・理事として建設委員会に関わっていました。細かいことは割愛させていただきますが、こういう形でようやく第1期の工事が先ほどの修正された計画に基づいて始まって、2012年3月に竣工しました。

竣工したのも開校の直前の段階で、これは今でも思い出しますが、三好キャンパスから笹島キャンパスへの移転作業を慌ただしく行ったという記憶があります。移転作業そのものも大きな課題でしたが、三好キャンパスにあった図書資料のすべては笹島キャンパスの図書館には置けませんので、大部分の図書は豊田市にある外部書庫に収めるということになっていまして、その辺の作業も加わったということです。

笹島のキャンパスは2012年4月にオープンしました。ささしまライブ24地区にはJICA中部と商業施設の建物はすでにありましたが、地区の中央部分や大学の西隣などは広い空き地のままの状態で、そういう意味では多少寂しい状況でのスタートであったと記憶しています。

1-3 第2期工事と計画変更

第2期工事のほうに入りますが、第2期工事も先ほど申し上げたとおり計画の大枠は2009年3月の時点で決定していましたが、環境にまた変化があるわけです。大きな環境変化としては、第1期工事はリーマンショック後の不況による不動産価格の低下状況にありましたが、第2期工事の時は、逆に不動産価格がかなり値上がりしたことです。これはアベノミクスの影響も絡んできますが、特に2013年以降、建設資材などがかなり値上がりしていったという状況があります。こういう環境変化の中で対応せざるを得なかったということです。

いろいろな変更案、選択肢を作成・検討した記憶がありますが、代表例として2つ紹介したいと思います。まず1つ、こういう状況の中でももとの計画どおりにはいかないだろうという判断のもとに、かなり修正をかけた提案が検討されました。これがいわゆるD2案です。D2案は2009年3月の先ほど見た計画に比べて一層の規模縮小を図るという内容の提案でした。

その内容の特徴のひとつは、高層棟の20階を14階に変更することです。これは高さが100メートル級ではなくなり、その3分の2ぐらいの高さになってしまいます。しかも、ポイントは、高層棟の一角に空間を設けるエコポイドと言われる部分があり、南北の風通しと上下階の気流を促すという狙いであったのですが、確か、この14階の案ではエコポイドがなかったと思います。それも取りやめるという内容でした。さらに、延べ床面積を縮小するという、具体的には2009年3月の計画に比べて29%縮小して1万8,000平米余りにすること、さら

に工期の延期も行って、当初は15年4月末オープンだったのですが、それをほぼ2年先延ばしにするという内容でした。

こういう案を取りまとめて、早速名古屋市に相談をかけたのですが、名古屋市はこれについて承認しませんでした。主な理由は、やはりここです。つまり、100メートル級の建物の中央部分にエコボイドがある、これはある意味でシンボル性が高いデザインである、と名古屋市は考えていたわけで、それがなくなるということは計画の本質的な変更であり、認めることはできないということで承認を得られなかったようです。従って、それが駄目ならまた別の案を考えざるを得なくなりました。

次に紹介したいのはF案です。この案は名古屋市のコンセプトを考慮して建物の高さエコボイドを維持するというものです。ただし、反面で延べ床面積を縮小するものでした。

高層棟の階数はこの案ではほぼ元に戻り20階建てにする。ただし、詳しく見ると、高さが94メートル弱ということで、当初の高さよりもやや低めに設定されています。どういう工夫をしたのかというと、少し余談にもなりますが、20階建の高層棟ではありますが、1階分の床と床のあいだの高さがすべて同じではありません。おそらく8階以上の部分だと思いますが、これは研究室が入る8階から18階まで、さらに会議室等のある19階、20階もありますが、そこは7階以下に比べて1階分の高さを少し低くするという工夫をしているのです。設計図を詳しく見ないと分かりにくいですが。その結果、20階建ての高層棟を隣の11階建ての講義棟と比べると見た目の高さの違

いは、階数の違いほどにはありません。

それから、延べ床面積に関しても、先ほど見ましたD2案よりさらに縮小しました。具体的には、2009年3月の計画時点との比較で言うと、33%ほど縮小しています。こういうことで、高さは20階に戻したが、床面積は縮まったということなので、当初に比べると幅の狭い建物になりました。さらに、2007年12月のささしまライブ24地区開発提案競技の時の構想と比べて、このF案は延べ床面積が43%減っています。言い換えれば、当初を100とすると57くらいの面積に縮小したのです。これはコストをいかに削減するかのいろいろ検討の末にやむなく取った措置でした。このように修正に修正をかけて、改めて名古屋市と交渉しまして、名古屋市から最終的な承諾を得ました。これが2013年7月のことです。

施設面の変化ですが、教室数は81室を120室に増加しています。当初、第1期工事の場合、講義棟の3階と4階は教員の研究室に充てていましたが、研究室を高層棟のほうに全部移しますので2フロア空ができます。そこを教室用に変更したことが大きいです。

それから、大学院5研究科を車道キャンパスから笹島キャンパスへの移転を図る、そして資金計画は、この時点の判断として62.5億という水準に設定し、その資金調達には自己資金をあて、借入はしないこととしました。こういう修正をかけて改めて名古屋市と交渉し、承認を得ました。2013年7月のことです。

ただ、その後も困難が続きまして、先ほど言ったように資材の値上がりは、もっと顕著になっていきました。その結果、競争入札

をしたけれども不調に終わってしまいました。これについてはいろいろ交渉を重ねて、最終的には鴻池組に引き受けていただきました。ただ、鴻池組の提示した価格もこちらの計画していた価格に比べるとかなり上回っていたのです。そのため、資金計画の再度の見直しを行い、当初価格より大幅な値上げ修正を行なわざるを得ませんでした。最終的には94億となりました。

この増額に対しては、借り入れをしないで対応することにしました。ただし、三好キャンパスの土地の想定売却資金を依然として算入していました。このときを今思い出しますと、これで実行するか、建設を延期するか、という本当にぎりぎりの選択を迫られたと言えます。当時、佐藤元彦学長・理事長のもとで私は経営担当の副学長をしていましたが、この機会を逃すとおそらくチャンスはもうないだろう、という悲壮な思いで決断をした次第です。

その一方で、いろいろなコスト削減努力をしなければいけない。これは言えば切りがありませんが、例えば、B2敷地に建てるグローバル・コンベンションホールのサイズも計画修正を加え、天井高をやや低くして容積を小さくしました。また、各研究室の天井板をあえて設置しないということで経費を抑えました。研究室の上を見ますと空調の機械とか通気管とか丸出しにみえます。第2期工事は、こうして2014年12月に起工式を行い、最終的に2017年3月に竣工しました。

2 笹島進出後の変化

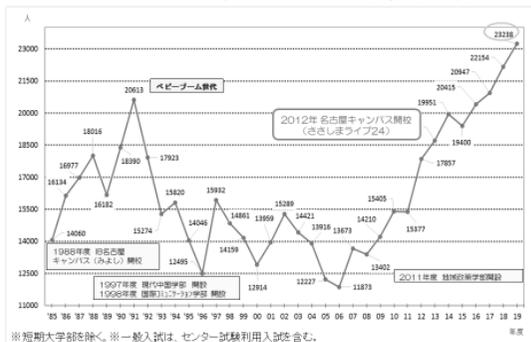
さて、次に、笹島移転後の大学の変化につ

いて簡単に紹介いたします。笹島キャンパスへの移転をどう評価したらいいのかというのは、今の段階ではまだ難しいところがあります。今後、いろいろな面から検証して評価すべきであると思います。笹島キャンパスに移転後にどのような取組をしていったのかを含めて、いくつかの面から移転後の変化についてみてみます。まだ検証は不十分であることをお断りしておきます。

2-1 入試における変化

まずその後の入試状況についてです。これは比較データがあり、分かりやすいところです。第一に、この図は1985年から2019年までの一般入試における各年度の延べ志願者の推移を示したものです。入試の説明会等でよく使っているものです。これをみますと、1991年に一度ピークを迎えました。第2次ベビーブームであるとか、臨時の定員増もあり、志願者がかなり増えました。ただし、その後はご覧のとおりで、1997年、98年にそれぞれ新学部(現代中国学部と国際コミュニケーション学部)をつくって一時的な反転はありましたが、その後はまた減少していきます。2006年がボトムですが、1991年の数字と単純に比較すると、半分近くに減ってしまいました。その後の傾向は

4-1-1 入試における変化：一般入試志願者の推移



ご覧のとおりで、おおむね右肩上がりです。2019年には2万3千名を越え過去最多となりました。これには2011年の学部(地域政策学部)の新設、2008年の笹島キャンパスの計画公表、2012年の笹島キャンパスの開校があり、その影響が多少ともあったと考えられます。

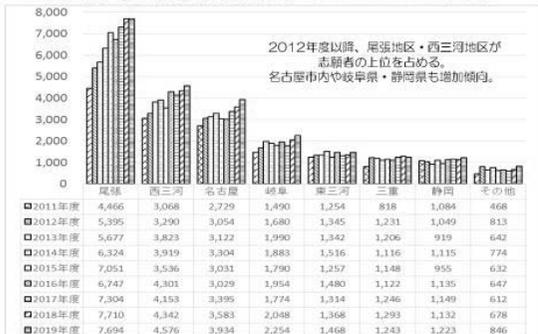
もちろんもっと広い視野から見ると、受験生も上位の大手私立大学とか国立大学が定員管理の厳格化でだんだんと合格が難しくなるなかで、それを見越した受験生の判断として、安全確保のためにより下位の大学にも多く併願していく、そういう傾向が実はここ10年ぐらい続いています。そういう傾向も影響していますので、それを合わせた数字として見なければいけないだろうと思います。志願者の増大がいつ反転するかは何とも予想が付きませんが、その反転はおそらく確実にあると思っています。

第二に、志願者数の地域別分布を見ますと、断トツに尾張地区が増えています。これは笹島キャンパスの開校と関連していると思います。そして西三河、名古屋、岐阜も増えています。それ以外の東三河のほうは、多少増えている部分もありますが、そんなに大きな変化は見られないという状況です。従って、2011年以降の志願者増のかなりの

部分は、愛知県の西側の地域と岐阜の高校生によるものと言っていると思います。実際問題として、各学部の志願者数を見ますと、短期大学部を除く全ての学部において地域別志願者数のなかで最も多いのは尾張です。これは今までおそろくなかったのではないかと思います。つまり尾張のより多くの学生が、笹島キャンパスの学部だけではなくて、豊橋キャンパスの学部のほうにも応募しているという一種の波及効果があったのではないかと見ています。

第三に、受験生からみた本学への志願度の推移を見たものです。リクルート進学総研は、毎年4月に東海地区の高校3年生に対してアンケート調査を行っています。その結果を大体夏ごろに公表していますが、その結果を時系列的に見たものです。ここで特に注意してほしいのは、文系に限っているということです。愛知大学は文系の大学ですので理系はありません。愛大への志願度にはそんなに大きな変化はみられず、志願度ないしはそのランキングにおいて、このようにほぼ同じような感じで来ていますが、しかし、今年は南山大学と同率1位という結果になっています。リクルート進学総研が文理別の集計を始めた2009年以降、愛知大学が文系大学で志願度1位に

一般入試地区別志願者数推移(2011~2019年度)



東海地区高校生の志願度ランキング

志願したい大学ランキング(東海地域高校3年生)

年度	文系	志願度%	文理系全体	志願度%
2010	3位		7位	
2011	3位	8.9	8位	5.4
2012	3位	9.8	9位	5.6
2013	2位	11.3	7位	6.2
2014	3位	10.5	6位	6.3
2015	3位	8.3	11位	5.0
2016	5位	7.6	10位	4.7
2017	4位	9.9	8位	5.8
2018	2位	11.1	8位	6.2
2019	1位*	10.8	6位	6.8

*南山大と同率1位、文理別集計を始めた2009年以来初めて リクルート

なったのは初めてという状況が生まれています。東海地区の高校3年生からみた愛大の魅力が上がったものとして注目しています。

またこれは今年に限定した話ですが、同じリクルート総研が、高校3年生の学問領域別の志願度を調査しています。その結果を見ますと表のとおりです。法律・政治、文化、地理・歴史、文学、観光コミュニケーション・メディア、そういう学問領域における東海地区の高校3年生の志願度ではいずれも愛大が1位になっています。対象の大学は東海4県の大学に限定せずに、全国範囲の大学を含めています。これは今年の話なので時系列ではありませんが、愛大はこの点で高く評価されているといってもよいでしょう。

第四に、東海地区の高校3年生から愛知大学はどんなイメージで見られているかを見てみます。この調査もリクルート総研によるものです。あくまでこれは高校3年生のイメージですが、そのランキングを時系列的に私が整理したものです。一部に確かに変化はあることはありますが、そんなに大きな変化は見られません。「偏差値が自分に合っている大学」、「入試方法が自分に合っている大学」という点では比較的高めに評価されています。「親しみやすい大学」というのも、変動はありますが、今年も1位に入っています。それから、これは笹島効果だと思いますが、「交通の便が良い」、「キャンパスがきれい」、「遊びに行くのが便利である」という項目はいつも比較的上位を占めています。これは東京の大学も対象に含めてカウントしています。こんなところが高校生のイメージとして評価されている点

です。

第五に、愛知大学に入学した高校生の所属する高校がどのようなレベルの高校かを見たものです。高校は進学度ランク別にA、B、C、D、Eまであって、Aランク校とはその地域のトップレベルの高校で、高校生の大半が国立志望ないしは有名私立大学を志望しています。このランク別高校の入学比率を近年の4年間でみると、一定の変化が見られます。近年の一般入試の入学者数は、ほぼ1,400名前後ですが、Aランク校は2016年の11%か2019年の18%に増えました。7パーセントポイントの増加とは、実数でいうと大体100名ぐらいが増えたことになります。他方において、Bランク校は40%の前半レベルで推移しています。Cランク校からの入学者は40数%から37、38%に減少し、Dランク校以下では3%から1%未満に確実に減っています。全体のボリュームとしてB、Cランク校が最も多いのですが、その中でもA、Bランク校55%から61、62%に増加しているのに対して、C、Dランク校は45%から38%前後に下がっています。入学生の高校ランクが上昇していることは明らかです。

一般入試入学者の高校ランク別比率

年度	Aランク	Bランク	Cランク	D・E他	入学者数
2016	11.0	44.4	41.6	3.1	1460
2017	13.0	41.7	42.4	2.8	1374
2018	17.7	45.0	36.9	0.4	1414
2019	18.0	43.2	38.0	0.8	1438

第六に、愛大の入試偏差値の動向から見てみます。このデータは河合塾のもですが、表の下に偏差値水準を示しています。この10年余りの推移をみますと、法学部は当

初から一貫して高めでしたが、経済学部、経営、会計、現代中国学部、それから国際コミュニケーションの2つの学科、いずれにおいてもこの10年余りのあいだで水準が一定程度レベルアップしているといえます。短期大学部も2019年に上昇しています。ただし、文学部と地域政策学部は、専門別入試、コース別入試というものがあり、この表に納まり切れないので割愛しました。地域政策学部、文学部も、2012年度以降、同じような傾向が見て取れます。そういう意味では、2012年の笹島進出以降をそれ以前と比べると、ほとんどの学部で偏差値が少し上昇しているといえます。

入試難易度水準(河合塾指標)

	2004	2006	2008	2010	2012	2014	2016	2018	2019
法学部	6	6	6	6	7	7	6	6	6
経済学部	8	9	8	7	7	6	7	6	6
経営学科	7	8	8	7	7	6	6	6	6
会計F科		8	9	8	9	8	8	6	6
現代中国学部	7	10	10	8	7	9	8	7	7
英語学科	7	7	7	7	5	5	5	5	5
比較文化学科	8	9	10	8	6	5	6	5	5
文学部		8	8	7	専攻別入試				
地域政策学部					コース別入試				
短期大学部	14	12	13	BF	13	13	13	13	11

5: 55.0~57.4, 6: 52.5~54.9, 7: 50.0~52.4, 8: 47.5~49.9, 9: 45.0~47.4, 10: 42.5~44.9, 11: 40.0~42.4, 12: 37.5~39.9, 13: 35.0~37.5

以上、入試に関わる変化についていくつかのデータからみてみました。総じて、笹島進出以前に比べると、この間の変化はよりプラスの方向に変化していると評価できるだろうと思います。

2-2 教育における変化

次に、教育面における変化についてです。これは学生が入学して以降のことですが、評価が難しいです。必ずしも証拠のデータが整っているわけではありません。それでも、第一に、この間、愛大の学生に対する印象は多少とも変わったようです。多くの教

員から最近の学生イメージを聞いていますが、それを大体まとめると、以前に比べると、授業に真面目に出ていて意欲的な学生が増えているのではないかと思います。授業中おしゃべりをしている、授業中スマホを見ている、副業をやっているなどの学生は、もちろんなくはないでしょうけれども、最近少なくなったようです。他方で、これは課外活動も含めて、地域貢献や国際交流に関心のある学生が増えているような印象を受けています。それから、笹島キャンパスとの関連があるのかもしれませんが、学生が印象として対応がスマートになった、特に女子がおしゃれになった、これは教員だけでなくOBの方からもこういう声を聞きます。これらはあくまでも印象レベルの変化です。

第二に、教育面での変化や新たな取組については、いくつか指摘できると思います。1つは国際化教育ですが、現代中国学部、国際コミュニケーション学部などを含めて、世間では学生の国際的学習活動への関心は内向き志向である、とマスコミ等よく言われていますが、実際は違うのではないかと思います。学生の国際的な関心は増えているのではないかと思います。例えば、海外フィールドワークをやっていますが、特に今年から経済学部はニューヨークのフィールドワークを始めましたし、これは課外活動ですが、タイのフィールドワークも昨年に続いて実施しました。注目したいのは、いずれも応募者が予想以上に多かったことで、例えば今年タイのフィールドワークは定員30名に対して120名以上の応募がありました。その結果、学生の絞り込みを図るのが一苦勞だったと聞いています。結果、二つ

のチームを編成して 2 回に分けて計 60 名ほどを派遣したと聞いています。海外留学も、全体として、短期、長期含めて昨年のデータで 460 名前後だと思いますが、短期のフィールドワークないしは 1 セメスターの留学生を含めて、この間一定の伸びを示しています。グローバルラウンジでの語学学習や交流も大きな効果を発揮しています。さらに学生のボランティアの国際的活動も盛んになっています。

それから、現代中国学部が文部科学省グローバル人材育成推進事業に採択され 2012 年から 5 年間の期間で取り組みました。現代中国学部独自の現地語学プログラム、現地調査、現地インターンシップは全国的にも特徴的なものですが、教育の成果をあげていると思います。私は現地調査の報告会や現地インターンシップ報告会に何度か出席したことがありますが、学生の努力と成長にはとても感心しています。学生はそれぞれのプログラムのなかで実地体験を通して学習の成果をあげていると感じます。

大学では数年前に、学生の留学への関心度をアンケート調査したことがあります。その結果は、各学年の中で、海外留学の希望・関心が一番多い学年は 1 年生でした。上の学年になるほど関心はむしろ低下するという結果が出ました。これには上の学年になると就職活動とか、留学費用とか、現実的な課題があります。結果から言えば、低学年のレベルでの留学や国際的な活動には一定の動機付けや支援などをすれば伸びる可能性があります。

次に地域連携教育について、これは強調しておきたいのですが、本学ではこの間、これに注力していると言っていると思います。

地域政策学部が設立されたのが 2011 年です。それ以降、地域政策学部を中心として学生の地域連携や地域貢献活動が正課授業ないしは課外授業の中で数多く組み入れられています。また各種のボランティア活動、学生のボランティア団体もこの間かなり増えまして、社会的にも評価されています。その背景として地方自治体等との連携協定の締結がありますが、これは後でまた述べたいと思います。

ただ、いかんせん、この結果どういう学習成果が出たのかを客観的に説明するのは難しいところがあります。最近、教育の目標に対して教育の成果、学習の成果を可視化する、目に見える形で示すことが各大学に求められています。本学でもそれに取り組んで検討していますが、その辺の具体的な指標が十分まだ整っていません。これからの課題です。

第三に、2012 年から愛知大学は毎年卒業年次生に対して学習成果の自己評価のアンケートをとっています。この趣旨としては、大学の理念、目的への理解や汎用的技能、社会的技能、学力の習得状況について学生の認識を把握することです。これは大きく分けて、全学部共通の設問を設定する部分と各学部が独自に設定している部分の 2 つに分かれます。全部載せるわけにはいきませんので、ここでは各学部共通の設問に限定します。それが問 1 から問 5 です。

問 1 は建学の精神の理解を深めることができたか、問 2 は積極的なコミュニケーション、チームワーク、協力で物事を取り組む力を身に付けることができたか、問 3 は論理的な思考能力を身に付けることができたか、課題を解決する能力を身に付けること

ができたか、問4はかなり一般的で人間性、教養、社会的倫理を身に付けることができたか、問5は主体的、総合的な判断をできる能力と、かなり一般的で抽象的な設問ですが、この結果がどうなったのか、表のとおりです。これは毎年のアンケート回答のなかで回答者全体に占める肯定的な回答の比率です。肯定的回答というのは、5択の設問がありまして、その中から「そう思う」というのと「ややそう思う」という2つを合わせた回答のことです。

学生の自己評価結果(肯定的回答の比率%)

年度	問1	問2	問3	問4	問5
2013	54	81	81	82	71
2014	56	81	80	79	69
2015	54	80	81	77	73
2016	53	80	83	79	72
2017	57	80	81	81	72
2018	63	81	84	85	77

肯定的回答:5択のうち「そう思う」と「ややそう思う」の合計

これを見ると、2013年から2017年において各項目の肯定的な回答の比率はあまり変化が見られません。ただ、ひとつ残念なのは、問1の建学の精神に対する肯定的な評価が総じて低いことです。これは大学史に関する科目が少ないことや建学の精神に関わる体験的な学習体験がまだ少ないということが関係あると思います。それはそれとして、問2から問5までは総じて8割ぐらいの肯定的な評価を毎年受けていることから、総じて高い評価を得ているといえます。ところが、今年の結果を見ると、それ以前の評価と比べるとより高い評価が増えたのです。それまでの数値と1ポイントから5ポイント上がっているという結果が出ていました。これは一体なぜなのだろうか、ということをおの間考えています。これはアンケー

トに回答する人はより積極的な学生だったのであろうか。また学生本人の主観的な評価と学生本人に対する客観的な評価、これは科目の成績ですが、両者はどのように関連しているのだろうか。これについてはある仮説がありまして、それは成績のいい能力の高い人というのは比較的自分の成果を控えめに評価する傾向がある、逆に成績の良くない人、低い人は自分の能力、成果を過剰に評価する傾向があるという仮説です。それとの関連はどうかという点も含めて、もっと理解を深めて今後の対策の参考にしたい。そんな考えから、IR委員会に調査分析を依頼しています。客観的な評価として何を選ぶか、これも課題なのですが、一般的な指標として学生のGPAがあります。それとアンケート結果にみられる学生の自己評価とはどういう関係にあるのか検証したいと考えています。

時間をかなりとってしまいましたので、研究については割愛いたします。

2-3 地域連携の推進

地域連携、これは先ほど少し触れましたが、本学と地方自治体・団体との連携協定(大学間協定を除く)の数は、2011年度以前と以降を比較しますと、かなり増えていきます。例えば、2011年度以前では10の協定でしたが、2012年度以降は今年度まで計28の協定締結となっています。特に佐藤前学長の時代には積極的に地方自治体等との連携協定を結んでおり、私もそれを引き継ぐ形になっています。この間も弥富市、知立市、売木村、岡崎市、中部6県(就職支援)、豊橋産官学連携等についての連携協定を新たに締結しました。これが1つです。

それから、大学としても地位連携の組織的な体制を整えました。全学の地域連携方針と計画を策定し、地域連携室の体制を、連携室長、副室長、各学部の委員から構成される全学的な組織に改編しました。同時に、それを支える事務組織として地域連携推進事務室を新たに設置し、担当職員も増やしました。

これからの課題はいろいろありますが、その一つにささしまライブ 24 まちづくり協議会というのがあります。大学もそのメンバーですが、都市部地域における連携をいかに進めるか、大学はそこでいかなる役割を担うのかということがあります。これは検討しています。また文部科学省の私立大学研究ブランディング事業、これは昨年度末に本学が選定された事業ですが、その事業計画の一環としても、名古屋笹島地域等における地域マネジメントの組織化と役割発揮を組み込んでいます。

最後にまとめですが、第一に、先ほど申し上げたとおりで、本学の笹島への移転は当初の予想以上の時間をかけていろいろな課題に直面しながら紆余曲折を経て成し遂げた困難な大きな事業でありました。これは教職員皆様のご協力を得たおかげだと思っています。第二に、笹島への移転後の大学の変化には、先ほど紹介したように入試、教育、それから地域連携等において、肯定的に評価できる変化ないしは取組が比較的多く見られると言ってよろしいかと思えます。そういう意味では、笹島への進出はプラスに評価してもよろしいのではないかと私は思っています。ただ、いろいろな課題があることは言うまでもありません。大変長くなりましたが、以上をもちまして私の報告を

終わります。どうもありがとうございます。